

化

文

かれたばかりだった。当時16歳の私は旧制池田中(現・池田高校)の5年生で、応援団長に駆り出されていた。

第1回、隣ではゴング戦後初の選抜中等野球(現・高校野球)が終わった直後の4月13日。同大は0-45で慶大に完敗した。観衆はわずか700人。外野の芝生で最終の第4クォーターが始まろうとする時、ホームベ

新聞社の関係者は球技場ではなく、すり鉢状の観客席のあるスタジアムで開催にこだわった。後で聞いた話では、最終的には阪神電鉄サイドから「外野は空いているけど、どうですか？」と打診され、ボクシングと同時並行の強行開催が決まったそう。

根負けして関西学院大学へ進み、アメフト部の門をたたいた。最も印象に残っているのは、関学大が初出場した49年の第4回。私は攻撃ラインの第1列で、突進する味方のために走路を切り開くガードとして試合に出た。連覇を狙った慶大を25-7で破ったこの試合が、関学アメフト部にとっては黄金時代への序章となった。私の半生でも

守両方を担っていた。この前の年から米軍の下士官だったロー軍曹がコーチに来てくれた。今でも見劣りしない近代的な作戦で慶大に勝ったことも、あの高揚感につながったのだろう。

0人を集め、関学大が残りの4秒で42-42の同点に追いつき日本大学と両校優勝。第40回で明治大学は、残り6秒であと3時のフィールドゴールを決めれば逆転勝ちというところまで追ったが、わずかに右にそれて関学大に敗れた。明大・吉村祐二選手はこのキックこそ外したが、試合では大活躍。関学大の応援席からも吉村ゴールがわき起こった。

初優勝の第4回から関西リーグでは33連覇と無敵を誇った関学大だが、甲子園ボウルでは立教大学や日大に幾度となく苦杯をなめている。古くからのアメフトファンには、関学大の青と日大の赤、宿命ともいえるライバル対決が印象に残っているのではない。

終戦の年は9月に和歌山へ出向き、上陸する米軍の戦車に体当たりする「特別任務」を課せられていた。九死に一生を得たこの身、誰かの役に立ちたいと思う気持ちは強い。78歳となった今でも、試合で記者席の隅に座るのはそのためだ。今年には61季ぶりに出場する関大と常連の法政大学の対決となった。記者からのどんな質問にでもすぐに答えられるように、今から心している。(ふるかわあきら 日本アメリカンフットボール協会顧問)

突き進め「甲子園ボウル」

◇大学アメフト日本一決定戦、感動の歴史を次代にパス◇

古川 明



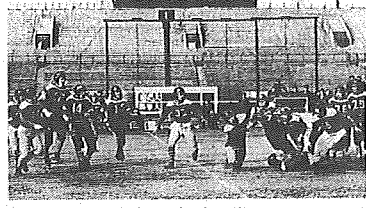
最高瞬間であり、今思い出しても涙が出る。反対に初出場校に負けた慶大の選手は、頭を丸めて東京に帰ったと聞いた。当時は今のように攻撃(オフエンス)と守備(ディフェンス)にそれぞれ専門の選手がいる完全分業制ではなく、11人が攻

運営責任者として目の前で見てきた。劇的なドラマは何度もあった。84年の第39回大会は当時最多タイの3万5000

外野席は超満員で、アルプス席や内野席にまで人があふれた。史上最多の4万5000人を集めたのは関学大が25-20で専修大学を破って6年ぶり

アメリカンフットボールの大学日本一を決める甲子園ボウルが13日、大規模な改装を終えた甲子園球場に3年ぶりに帰ってくる。関西、関東以外の大学にも初めて門戸を開いた記念すべき大会を、再び甲子園で開催できるのは喜ばしいことだ。私は1947年に甲子園ボウルが初めて開かれて以来、ほとんどの試合を目撃してきた。記念の大会を機に、私が見た甲子園ボウルの歴史を振り返ってみたい。

もともとボクシングの試合が先に球場を押しやっていた、アメフトは阪神電鉄に一度は断られていた。この交渉をしたのが、36年のベルリン五輪における200メートル平泳ぎの金メダリストで、当時毎日新聞社の若手記者だった故・葉室鉄夫さんだ。



関学大が初優勝した第4回甲子園ボウル

本場米国のアメフトの熱気を知る毎日

62年前に観客席から見た第1回大会は、慶応義塾大学対同志社大学。甲子園は進駐軍の接収が解